令和8年度第3回伊丹市学校教育審議会（義務教育部会）
議事録（要旨）

1 日 時
令和8年10月2日（金）15時30分～17時50分

2 場 所
伊丹市役所 1階 101会議室

3 出席者
（委 員） 山口 偉一(関西福祉大学教職センター 教授)
深野 康久（大阪教育大学教職大学院 元教授）
藤原 久嗣（伊丹市 PTA 連合会 事務局長）
山口 啓子（伊丹市自治会連合会 会計）
粟生 桂治（南中学校校長）（代表校長）
廣重 久美子（有岡小学校校長）（代表校長）
川本 良和（市民公募委員）

（事務局） 伊丹市教育長
伊丹市教育委員会事務局教育次長兼未来教育プロジェクトイノベーションマネージャー
伊丹市教育委員会事務局学校教育部長兼未来教育プロジェクトプロジェクトマネージャー
伊丹市教育委員会事務局副参事兼未来教育プロジェクトスーパーバイザー
伊丹市教育委員会事務局未来教育プロジェクト主幹兼未来戦略チームチームリーダー

（傍 聴）5名

4 次 第
① 開 会
② 委員の出欠と会議の成立
③ 議事

5 議 事
前回の振り返り
議題1「子どもたちが多様化していることを前提とした学びのあり方について②」（議事録別紙）
議題2「教職員の働き方改革について」（議事録別紙）

６ 議事録(要旨)

前回の振り返り＜議事説明＞事務局から資料に基づき説明(配布資料2)

【委員 A】

私の住んでいる地域では、１つの小学校から１つの中学校へ進学し、１つの中学校には２校または３校の小学校から進学するなど、小学校と中学校の通学区域が概ね重なる形となっています。

一方、伊丹市では、１つの小学校から複数の中学校へ進学する場合があります。このことについては今後の議論になると思いますが、例えば、小学校で築いてきた子どもたちの人間関係が進学によって分かれることや、小学校の教職員が複数の中学校への進学を念頭に置きながら指導する必要があることなども考えられます。

また、私の住んでいる地域では小・中学校の校区が分かりやすく、地域の祭をはじめとした様々な活動についても、学校を基盤として取り組みやすい状況があります。伊丹市では、小・中学校の通学区域と地域活動との関係について、どのような状況にあるのか、また、何らかの工夫をされているのかという点も気になりました。

ただし、単純に小学校と中学校の通学区域を一致させればよいということではないと思います。それぞれの通学区域は、歴史的・地理的な条件をはじめ、様々な事情を踏まえて設定されているものだと思います。

一律に通学区域のあり方を決めるのではなく、それぞれの地域の状況も踏まえながら、今後検討していく必要があるのではないかと感じました。

議題Ⅰ「子どもたちが多様化していることを前提とした学びのあり方について②」
＜議題説明＞事務局から資料に基づき説明(配布資料3)

【部会長】
それでは、審議に移りたいと思います。
多様化する子どもたちへの対応について、特別支援教育と長期欠席児童生徒に焦点を当てて説明いただきました。
前回の審議でもありましたように、多様化する子どもたちを包括する視点として「カラフルな教育」を掲げ、一人ひとりのニーズに応じて、それぞれの学びをどのように保障していくのかということに取り組んでいます。一方で、その実現に向けては様々な課題があることも説明いただきました。
本日は改めて、一人ひとりの学びを保障するために、人的・物的・環境的にどのような整備が必要なのか、また、そのような取組がすべての子どもたちの学びにどのようにつながっていくのかという視点が示されています。
前回から引き続きの内容となりますが、それぞれの立場からご意見をいただきたいと思います。
まず、日々子どもたちへの支援に取り組んでいる学校現場の立場から、現在の体制や学ぶ場所を含め、どのような課題があるのかについてお伺いしたいと思います。

【委員 B】
中学校においても、特別な支援を必要とする子どもや長期欠席の子どもは年々増加しており、20 年前と比べると学校の状況は大きく変化しています。
一人ひとりに目を向けると、それぞれ異なる事情があり、それぞれに応じた支援が必要です。特別支援学級に在籍する子どもについては特別支援学級担任が対応していますが、その人数も増加しています。
また、中学校の特別支援学級担任についても、必ずしも特別支援教育に関する免許を有している教職員だけではなく、研修を受けながら専門性を高め、それぞれが努力して対応しているのが現状です。担任同士で相談し、日々悩みながら対応している状況があり、こうした教職員へのサポートを充実させることができれば、より子どもたちへの支援につなげられるのではないかと考えています。
通常学級においても様々な子どもが増えており、教職員が前に立って一斉授業を行うだけでは対応が難しい時代になっていると感じています。一方で教職員数には限りがあり、教科指導や学級指導は担任や教科担当が中心となって進めています。そこに不登校対策支援員や特別支援教育支援員などが入り、サポートしていただいています。
しかし、支援を必要とする子どもの数が多いことに加え、子どもによっては、みんなの前で支援を受けることを恥ずかしいと感じる場合もあり、一人ひとりに応じた対応の難しさがあります。
その中で非常に重要なのが情報共有です。それぞれの支援者が子どもの様々な面を見ているため、その情報を共有しながら指導にあたることで、より手厚い支援につながると考えています。しかし現状では、ノートやパソコン上のフォルダ等で情報を共有していますが、勤務形態も様々であるため、関係者が集まって情報共有する時間を確保することは難しい状況です。
不登校の子どもについても、一人ひとりに様々な背景があります。例えば、学級担任が欠席

した子どもの家庭を訪問し、会えなければ翌日もう一度訪問するなど、担任も丁寧に対応しています。不登校対策支援員にも支援いただいていますが、対象となる子どもの数が増加しており、十分にカバーしきれない状況があります。より一人ひとりに丁寧に関わることができれば、学校へ行こうという気持ちにつながる場合もあると思いますが、十分に対応できないことにもどかしさを感じています。

また、支援を行うための場所の確保も課題です。特別支援学級、通常学級ともに教室をほぼ使用している学校もあり、サポートルームをどこに設けるのか工夫しながら対応しています。

中学校では、サポートルーム内にブースや仕切りを設け、個別に対応できるようにしていますが、現在ほぼいっぱいの状況です。今後さらに利用する子どもが増えた場合にどうするのか、教職員間で相談しながら検討しており、物理的な場所の確保も非常に大きな課題であると感じています。

【部会長】

今のお話から、大きく3つの課題があるように感じました。

1つ目は、人的な課題です。教職員が専門性を身につけるには時間が必要であり、専門性の確保と教職員数の両面から考えていく必要があります。

2つ目は、情報共有です。多様性を保障するためには、様々な立場の教職員や支援者が子どもに関わることが必要であり、そのための情報共有の時間をどのように確保するのかという課題があります。

3つ目は、教室等の物理的な空間の問題です。

これらは学校だけで解決できる問題ではありません。家庭との連携も重要になります。

そこで、今回の特別支援教育や長期欠席児童生徒への支援について、保護者の立場からお話を伺いたいと思います。

【委員 C】

特別支援教育については、支援を必要とする子どもが今後も増えていくことが考えられます。また、学校で教室が不足しているという話も聞いており、どのように解決していくのかは課題であると思います。

不登校対策支援員については、PTA 関係者の中にも現在活動している方や過去に活動していた方が多く、「もっと支援したい」という声も聞きます。一方で、予算等の問題もあり、思うように活動できないという話もあります。今年度、週 20 時間に拡充されたということですが、それでも十分ではないと感じており、さらに充実していただければと思います。

保護者としても、学校に任せるだけではなく、家庭で何ができるのかを考え、自分の子どもだけでなく、伊丹市の子どもたちにどのように関わっていくのかを考えることが必要だと思います。

長期欠席については、子どもによって様々な理由があると思います。休み始めてからでは、元の状態に復帰するまでに時間がかかる場合もあるため、学校に通っている段階から声をかけることも大切だと思います。家庭でも、子どもに困っていることがないか声をかけたり、悩みを聞いたりすることが重要です。保護者も忙しく、子ども自身も学校、習い事、宿題などで毎日の生活が決まっており、ほっとできる時間が少なくなっているのではないかと思います。

家庭で声をかけることや、何もしないで過ごせる時間をつくることも大切であり、そうしたことを PTA から保護者の皆さんにも伝えていきたいと考えています。

【部会長】

教育については、「ここまでは学校、ここからは家庭」と線を引くことができる問題ではないと思います。子どもが抱える様々な教育課題について、学校と家庭が手を携えながら進んでいく姿勢が大切であると感じました。

地域と子どもの関わりという観点も含め、ご意見をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

【委員 D】

私は昭和の時代に小中学校教育を受けた世代です。当時、私たちを教えてくださった先生方の中には、戦前の教育を受けた方もおられました。私たちは学校で民主主義の大切さを教わりましたが、その先生方自身は、それ以前には異なる価値観のもとで教育を行っていた時代を経験されています。

現在のインクルーシブ教育についても、同じような側面があるのではないかと考えています。障がいのある子どもとない子どもが共に学ぶことは大切です。障がいのある子どもも、いずれ社会に出て様々な人と関わりながら生活していくことになります。その意味でも、子どもの頃から共に学ぶ経験は必要だと思います。

一方で、現在学校の中心となっている 30 代、40 代前後の教職員自身が小中学校で受けてきた教育は、現在ほど多様性を重視したものではなかったのではないでしょうか。

現在では多様性が教育の大きな柱となっていますが、頭では理解できても、それを自分自身の価値観として十分に理解することが難しい場合もあると思います。

そのため、多様性については、先生や保護者、地域も、子どもに教える立場だけではなく、共に学ぶ立場であるということを前提にしていく必要があるのではないかと思います。

【部会長】

学校は社会の縮図であり、社会はその時代の状況を映し出しているということ、そして、多様性が重視される現在においては、教職員も「教える」だけではなく、自ら「学ぶ」という姿勢が必要なのではないかというご意見だったと思います。

前回の審議では、一人ひとりの可能性を伸ばし、寄り添う教育が大切であるというご意見もいただきました。本日の特別支援教育や長期欠席児童生徒への支援とも深く関わる内容だと思いますので、地域の立場から感じておられることをお聞かせいただければと思います。

【委員 E】

不登校の状況にある子どもが現実にいます。その子どもたちにも、学びを保障され、教育を受ける権利があります。そこにもっと目を向けていく必要があると思います。

地域にも学校に行けない子どもがいます。何か問題が起きたとき、早い段階で対応すれば解決につながることでも、周囲が見逃したり、保護者も仕事等で忙しく気づけなかったりすることがあります。

学校教育は、子どもたちが一緒に学び、時にはぶつかりながら成長していく場でもあると思います。その役割を学校の教職員だけに任せるのではなく、保護者、教職員、地域が一緒になって子どもたちを支えていく必要があります。

未来の教育を考えることも大切ですが、今、現実に学校へ行きたくても行けない子どもたち

をどう支えていくのかという、直近の問題も大切にしたいと思います。
　そのための具体的な手立てについて、さらに協議していく必要がありますし、専門的に支援するスタッフも必要です。担任だけで対応することは難しいと感じています。

【部会長】
　課題が大きいほど、誰か一人の責任と考えるのではなく、子どもたちをどのように育てていくのかという視点で、みんなで考えていくことが大切だと感じました。
　ここまで、学校現場、保護者、地域のそれぞれの立場からご意見をいただきました。事務局から補足等があればお願いします。

【事務局】
　委員の皆様から様々なご意見をいただき、事務局としても、今後の取組を考えていく上で大変参考になりました。
　不登校対策支援員については、取組を充実してきているものの、まだ十分ではないことや、地域にはさらに協力したいという声があること、また、多様性を捉えることの難しさや限界についてもご意見をいただきました。
　伊丹市では「カラフルな教育」を進めていますが、これは、現実の子どもたちと向き合う中から生まれてきた考え方です。目の前の子どもたちが多様化している状況に直面する中で、その違いを豊かさとして捉え、違うからこそ生まれる学びを大切にしたいと考えています。国においても、多様な子どもたちの深い学びを確かなものにしていくことが示されていますが、伊丹市としては、一人ひとりの違いそのものが、子どもたちの豊かな学びにつながるという考えを大切にし、その実現に取り組んでいきたいと考えています。
　また、直近の問題であるというご意見もいただきました。そのとおりであると受け止めており、今一度、できることはないのかという視点から、現在の取組についても振り返っていきたいと考えています。

【部会長】
　今のお話から「一人も取り残さない」という言葉が思い浮かびました。ここで少し視点を広げたいと思います。本日は、多様性という観点から、特別支援教育と長期欠席児童生徒という二つのテーマを取り上げています。それぞれ異なる課題ではありますが、共通する部分もあると思います。その点をどのように捉えておられるでしょうか。

【委員 A】
　皆さんのご意見を伺いながら、学校を中心として子どもを育て、子どもの課題を解決していく教育を伊丹市は目指しているのだろうと感じました。
　学校だけですべてを担うことはできないため、保護者や地域をはじめ、様々な方々と力を合わせながら進めていく学校づくりが必要だと思います。
　また、多様化に伴う課題は、地域や時代によって変化していきます。私の住む地域でも外国にルーツを持つ子どもが増えていますし、今後も新たな課題が生じることが考えられます。
　そのため、一つの課題を深めながらも、様々な状況に柔軟に対応できる教育が必要です。

また、学校そのものも、社会や地域に対して開かれている一方で、一人ひとりへの個別の支援にも対応できるような形が求められるのではないかと思います。

【部会長】

「オープンと個別」という視点で捉えることで、様々な課題を整理しやすくなるのではないかというご意見だったと思います。

最後に、小学校現場の立場からご意見を伺いたいと思います。通常学級も含め、学校には様々な子どもたちがいます。本日議論してきた一人ひとりの違いや状況に応じた学びについて、特別支援教育や長期欠席児童生徒に限らず、すべての子どもたちという観点からお話しいただければと思います。

【委員 F】

皆さんのお話を伺いながら、これだけ多くのひとが子どもたちのことを一緒に考え、支えていこうとしていてくださって、子どもたちは幸せだと感じました。

一人ひとりの学びを保障する環境には、様々な要素があると思います。教師も子どもと一緒に考え、学んでいく人であるということから、教師自身がその質を高めていくことも必要です。また、地域の方々が、自分たちの地域にも学校へ行けない子どもがいることを理解してくださるなど、社会や地域の理解も非常に重要です。そうした様々な要素が合わさることが、先ほどから出ている「学校だけではない教育」ということなのだと思います。教師が学び続け、社会や地域にも理解していただくことが、一人ひとりの学びの実現につながると考えています。

また、総合教育センターで、次期学習指導要領の作成に関わっておられる先生のお話を伺う機会がありました。その中で、「多様性の包摂」という観点から、公教育を担うものとして質と平等を確保すること、そして、一人ひとりを徹底的に大切にすることが、次期学習指導要領の考え方として示されていました。今回審議している内容にも、すべてつながるものだと感じています。

一口に不登校といっても、学校に来ることができている子どももいれば、来ることができていない子どももいるなど、一人ひとり状況は異なります。また、同じ障がいの診断名であっても、一人ひとり違います。それは、不登校や障がいのある子どもだけではありません。教室に 35 人いれば、それぞれが異なる環境、力、考え方を持っており、一人ひとりが違います。

そのため、不登校や特別支援教育に限らず、「一人ひとりが違う」ということを前提として、一人ひとりを大切にし、その学びを考えているのだということを、改めて認識する必要があると思います。

伊丹市が進めている「カラフルな教育」は、まさにそのような考え方なのだと思います。「カラフルな教育」という言葉の深さ、広さ、重さを改めて感じています。伊丹市として「カラフルな教育」を進めていくにあたり、改めてその意味をみんなで共有しながら進めていくことが、一人ひとりの違いや状況に応じた学びを実現することにつながるのではないかと思います。

【部会長】

ありがとうございました。本日の議論を踏まえ、第Ⅰの議題をまとめていただいたように思います。

議題2「教職員の働き方改革について」
＜議題説明＞事務局から資料に基づき説明(配布資料4、5)

【部会長】
それでは審議に移ります。
審議の視点として3つ示されています。視点ごとにご意見をいただきたいと思います。
まず、視点1「教職員が本来担うべき教育活動に専念できる仕事のあり方」についてです。先ほど資料7ページ、8ページで説明のありました「学校・教職員の業務の3分類」も踏まえながら、ご意見をいただきたいと思います。
学校と地域との役割分担や連携のあり方、保護者や地域との関係を含めた教職員の働き方について、ご意見を伺いたいと思います。
事務局からは、学校の業務を単純に他へ移すのではなく、持続可能な仕組みをつくっていきたいという説明もありました。その点も含め、どのように感じられましたでしょうか。

【委員B】
地域にとって学校は非常に大切な存在であり、基本的に学校と地域の関係は「持ちつ持たれつ」、いわばギブ・アンド・テイクの関係であると思います。
一方で、地域と学校との間に温度差がある場合には、不協和音が生じることもあると思います。例えば、地域では登下校時の見守り活動を行っていますし、地域の祭り等では学校の施設を借りたり、学校に人的な協力をお願いしたりすることもあります。
ただし、こうした活動によって教職員の本来の業務に支障が生じるようであれば、それは問題であると思います。学校と地域の関わりは、無理のない範囲で行うことが大切です。
私たちの地域は比較的学校との連携が深く、学校も地域も熱心に活動しています。双方が同じ思いで関わることができればよいのですが、どちらか一方が「なぜここまでしなければならないのか」と負担に感じるようになると、関係を続けていくことは難しくなります。
そのため、まずは教職員の本来の業務を優先し、地域としても教職員の負担を考えながら、無理のない形で協力していくことが必要であると思います。

【部会長】
学校は地域にとって大切な存在であり、普段から温かく学校を見守っていただいているというお話だったと思います。一方で、地域との連携によって学校の負担が大きくなり、本来の業務に支障が生じるようでは本末転倒であるという点も重要だと感じました。
地域から学校と関わる機会も多いと思いますが、役割分担や教職員を支えることについて、普段感じておられることをお伺いできればと思います。

【委員E】
私の地域では、毎月自治協議会を開催しており、校長先生やPTA会長、地域の関係者などが参加しています。最近では、PTA役員を経験された方が自治協議会の役員にも加わり、タブレットを活用して連絡や会議を行うなど、デジタル化も進んでいます。
学校からも、学校行事のお知らせや地域学習への協力依頼などがあり、都合がつくときには学校へ行

き、子どもたちと一緒に地域を回るなど、地域学習のお手伝いをしています。

また、地域の夏祭りでは学校の校庭を借りており、準備や片付けの際には、強制ではありませんが、教職員の方がお手伝いに来てくださることもあります。中学生がボランティアとして参加してくれることもあります。

私は、こうした学校と地域の関わりが一方的に教職員の負担になっているのではなく、「お互い様」の関係になっていると感じています。学校に助けてもらったから、今度は学校の行事などで自分がお手伝いしようという気持ちになります。これまでも、学校からボランティアの募集があれば、清掃活動などに参加してきました。

また、地域で PTA や自治協議会などの活動に関わってきた方が、現在はスクール・サポート・スタッフとして学校を支えている例もあります。地域や学校のことをよく知る方がスクール・サポート・スタッフとして学校にいることで、学校を訪れた際にも安心感がありますし、地域と学校との情報共有や連携もしやすくなっていると感じています。

一方で、教職員、特に校長先生や教頭先生などの管理職は、事務や保護者対応をはじめ、様々な業務を担っており、大変だと感じています。スクール・サポート・スタッフをはじめ、学校の状況に応じて様々な業務をサポートする人材をさらに充実していただくことで、教職員の負担軽減につながるのではないかと思います。

【部会長】

学校を支える人材を地域で育てたり、地域の人材が学校を支えるスタッフとして関わったりすることで、学校と地域との連携につながっているというお話だったと思います。私自身も小・中学校の校長を経験しましたが、地域の方々には様々な形で学校を支えていただき、大変ありがたく感じていました。

一方で、地域の行事、特に休日の行事に教職員が参加する場合には、教職員の勤務時間を適切に管理していくという働き方改革の方向性との間に難しさを感じることもありました。地域との関係を大切にしながら、持続可能な関わり方を考えていくことも必要だと思います。

それでは、視点 2「チームとして働く体制のあり方」に移ります。

教職員の時間的・心理的な余裕が少なくなる中で、大規模校の立場から現状についてお話しいただければと思います。

【委員 D】

学校の教職員の年齢構成は、この 20 年ほどで大きく変化しています。20 年ほど前までは 40 代、50 代の教職員が多くを占め、若手教職員が日常の中でベテラン教職員から様々なノウハウを学ぶことができる環境がありましたが、現在では 20 代、30 代の教職員が中心となっています。

その結果、これまで学校現場で蓄積されてきたノウハウを十分に引き継ぐことが難しくなっていると感じています。以前は特に意識しなくてもベテラン教職員が若手を支えることができていましたが、現在では、管理職と教職員の間に立ってつなぐミドルリーダーの役割が非常に重要になっています。

また、中学校では学年単位で行事や取組を進めることが多く、以前は学年の中に核となる担任がいて、若手教職員に助言しながら学年を引っ張っていく場面がありました。しかし、現在は同じ程度の経験年数の教職員が増えており、こうした核となる担任やミドルリーダーを育てていくことも大きな課題です。

若手教職員は教育への思いを持ち、非常に熱心に取り組んでいます。一方で、授業づくりや子どもへの対応、保護者対応などについては経験が必要であり、相談できる相手が少なくなっているという課題

があります。ベテラン教職員にも若手を育てたい、相談に乗りたいという思いはありますが、自分自身の業務で手いっぱいとなり、十分に関わる余裕がない場合もあります。

また、これまで続けてきた行事や取組についても、子どもたちの笑顔につながるものだから削りにくいという思いや、見直すことで生徒指導上の影響が出るのではないかという不安があり、なかなか改善や見直しに踏み切れない状況があります。多様な子どもたちへの対応が増える中で、教職員の業務も増えていくため、これまでどおりのやり方ではなく、何を見直し、どのように改善していくのかを考える必要があります。

管理職としても、様々な考え方や選択肢を示しながら、教職員自身が「これをやってみよう」「少し変えてみよう」と思えるようなチームづくりを進めていきたいと考えています。

働き方改革という観点では、教職員の私生活を守ることも非常に大切です。私生活に余裕があれば、教職員自身の気持ちにもゆとりが生まれ、それが子どもや周囲の教職員に余裕を持って接することにもつながります。その意味でも、ワーク・ライフ・バランスは非常に重要だと考えています。

また、地域との協力も大切ですが、地域行事への参加と働き方改革とのバランスを取ることには難しさもあります。地域の方々に日頃から支えていただいているからこそ、学校としてもできる範囲で協力していきたいと考えており、地域との関係を大切にしながら、持続可能な関わり方を考えていく必要があると思います。

【事務局】

様々なご意見をいただき、学校に関わる地域の方々や保護者の方々も含めて、子どもたちを支える一つのチームであり、互いに協力する存在であると改めて感じました。教職員が様々なことを抱え込みすぎないことで生まれた時間的・心理的なゆとりが、子どもたちへのよりよい関わりにつながっていくのではないかと考えています。

伊丹市においても、学校を支える人材として、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、支援員、スクール・サポート・スタッフなど、様々な人材の配置を進めてきたところです。

また、教頭の業務負担の軽減は重要な課題の一つであると考えています。教育委員会内にプロジェクトチームを設置し、3 年間で集中的に取組を進めるなど、負担軽減に向けた取組を進めているところです。

【部会長】

続いて、視点 3「教職員が専門性を発揮できる施設環境のあり方」に移ります。

教職員が教育活動に専念し、やりがいを感じながら働くことができる環境について、ご意見をいただきたいと思います。

【委員 F】

「教職員が専門性を発揮できる施設環境のあり方」ということで、アンケート結果や働きやすいオフィス環境の事例も示されていますが、物理的な環境を整えることは、教職員の働きやすさや、教職という仕事の魅力の向上にもつながると思います。

教職員が仕事をする中で喜びややりがいを感じるのは、授業がうまくいったときや、子どもの成長や変化を感じたとき、子どもが自分の思いを話してくれたときなど、子どもの姿を通して実感することが多いと思います。仕事には大変なことや思うようにいかないこともありますが、その中でも「教師をやっていてよ

かった」と思える瞬間があるからこそ、教職の魅力を感じ、仕事を続けていこうという気持ちにもつながるのだと思います。

一方で、授業がうまくいった、子どもの成長を捉えることができたと感じるためには、教職員自身が学び続け、自らの専門性を高めていくことが必要です。そのためには、学ぶための時間を確保することや、研修など学ぶ機会や内容が用意されていることも重要だと思います。

働き方改革においては、勤務時間を短縮することももちろん大切ですが、それだけではなく、教職員が仕事の中で自分の力を発揮し、「もっと工夫してみたい」「新しいことに取り組んでみたい」と思える環境をつくることも大切です。物理的に働きやすい環境を整えることとともに、教職員が学び続け、やりがいを感じながら働くことのできる環境を整えていくことが必要ではないかと思います。

【部会長】

ここで、保護者の立場からご意見を伺いたいと思います。学校へ行かれる機会も多いと思いますが、教職員が働く環境という観点から、学校施設について感じておられることがあればお聞かせください。

また、PTA として学校と関わる中では、教頭先生とやり取りをされる機会も多いと思います。先ほど複数教頭制についての話もありましたので、その点も含めてご意見をいただければと思います。

【委員 C】

現在の教職員は、子どもへの対応だけでなく、不登校や外国にルーツを持つ子どもへの対応、保護者対応など、以前と比べて様々なことに対応していく必要があり、大変だと感じています。学校へ行く機会もありますが、そうした中で子どもたちのために対応されている先生方には感謝しています。

また、資料にある教職員の時間外勤務の状況を見て、実際の勤務時間はどの程度なのだろうかと感じました。勤務時間として表れている数字だけでなく、翌日の授業準備などの仕事を自宅へ持ち帰ったり、休日に行ったりしているという話も聞きます。単に学校を早く退勤するだけでは仕事そのものがなくなるわけではないため、こうした実態を踏まえて、どのように業務を改善していくのかを考える必要があると思います。こうした働く環境の問題は、教員採用試験の倍率などにも表れているのではないかと感じています。

特に教頭先生については、PTA でもその業務量の多さが話題になることがあります。学校規模によって児童生徒数や教職員数が大きく異なる中で、大規模校であっても教頭先生が一人で様々な業務を担うことには限界があると思います。一人に負担が集中すると、業務のスピードや一つひとつの仕事の質にも影響することが考えられるため、複数教頭制については、ぜひ進めていただきたいと思います。

また、学校施設についても、築年数が経過し、日常の清掃だけでは十分にきれいにすることが難しい部分があると感じています。学校の環境は子どもたちが学習する上でも大切ですが、教職員にとっても、気持ちよく働くことのできる職場環境であることは、仕事への意欲にもつながると思います。

学校全体を一度に改修することは難しいと思いますが、資料に示されているオープンスペースや休憩スペースなども参考に、必要な場所から部分的に改修していくことも考えられるのではないでしょうか。教職員が気持ちよく働くことのできる環境につながるのであれば、少しずつでも施設改善を進めていただきたいと思います。

【部会長】

本日は、3 つの視点から様々なご意見をいただいてきました。先ほどは、「オープンと個別」という視点についてもお話しいただきました。学校は、現在も様々な方々に支えていただいており、今後も多様な人材

と連携しながら学校を支えていくことが必要になると思います。また、ミドルリーダーなど、学校内で教職員をつなぐ役割についてのご意見もありました。

そこで最後に、これまでの議論を踏まえ、3 つの視点全体を通して感じられたことや、大切にすべき点についてお話しいただければと思います。

【委員 A】

日本の学校教育は、子どもに対して幅広く全人的な教育を行ってきたことが大きな特徴であり、国際的にも評価されてきたと思います。伊丹市の「カラフルな教育」も、その流れの中にあると感じています。今後の教育を考える上でも、こうした全人的な教育という視点は大切にしていく必要があると思います。

その教育を最前線で支えているのが教職員です。以前、若い先生と、学校や教員が担う業務の整理について話した際、給食費の徴収について「家庭の状況を知ることができるので、自分で行いたい」と話していたことがありました。子どものことを深く理解したいという思いから出た言葉であり、教員というのは、子どものためであればどこまでも頑張ろうとする職業なのだと感じました。

一方で、だからこそ働き方改革は難しいのだと思います。何もしなければ際限なく働いてしまう教職員を守りながら改革を進める必要があります。その際には、単に業務を減らしたり、学校以外へ移したりするだけではなく、なぜその業務を見直すのか、その目的や考え方を教職員自身が理解した上で進めていくことが重要だと思います。

また、これからは教職員だけで子どもたちを支えるのではなく、地域の方々や様々な専門スタッフが学校に入る時代になっています。以前、地域の方が子どもの悩みを聞く取組を行っている学校を訪れた際、その方々が学校行事や子どもの状況について十分な情報を得られず、学校との連携に難しさを感じているという話を聞いたことがあります。

様々なスタッフを配置するだけではなく、その方々が学校の一員として必要な情報を共有し、教職員と連携できる仕組みをつくることが大切です。一方で、個人情報への配慮や、それぞれが集中して仕事をするための環境も必要です。施設面においても、オープンに連携できる場と、個別に集中できる場の双方を考えていく必要があると思います。

現在、教職員の働き方改革に向けて様々な施策が進められていますが、それらをより効果的に進めていくためにも、改革の基本的な考え方を学校現場で共有しながら進めていくことが重要ではないかと思います。

【部会長】

ありがとうございました。

ほかにご意見はありますでしょうか。

ご意見がないようですので、最後に私から議題2に関する所感を申し述べますが、まずは皆様、本日の議論を通して、様々な視点から貴重なご意見をいただき、有難うございました。

教員採用の倍率が低下しているという話もありましたが、私自身、現在、教員採用に関わる仕事をしています。学生には、「もう一度生まれ変わっても、もう一度教員になりたい」と話しています。それは、私自身が素晴らしい先生方に育てていただき、教員という仕事の魅力を感じてきたからです。

教員という仕事には、他の仕事にはない魅力があります。そうした魅力を次の世代へつないでいくためにも、子どもたちが日々の学校生活の中で、教員という仕事の素晴らしさを自然に感じ取ることのできるような学校や教員の姿を目指していくことが大切だと思います。その上で、教員の魅力ややりがいを大切

にしながら、働き方改革をどのように進めていくのかという視点が重要であると感じました。

　また、本日の議論の中で、伊丹の子どもたちは、これだけ多くの方々の思いに支えられていて幸せだというお話がありました。私も改めて同じ思いを感じています。

　では、本日はこれで終わらせていただきたいと思います。委員の皆様におかれましては、議事進行にご協力いただきましてありがとうございました。